Masako Ishii, Naomi Hosoda, Masaki Matsuo, and Koji Horinuki (eds). 2019. *Asian Migrant Workers in the Arab Gulf States: The Growing Foreign Population and Their Lives*. Leiden: Brill. xi+266 pp.

国際的な人の移動が容易となった現代、人々の移動の目的は様々である。移動の背景の一般的なものとしては、旅行、留学、ビジネス、出稼ぎ、宗教儀礼のための移動（例えば、巡礼など）が挙げられるだろう。それに加え、近年では、国内の内戦や紛争により、母国を離れざるをえなくなった人々も存在する。これに関しては、移民研究、難民研究やディアスポラ研究などにおいて盛んに議論されてきた。しかし、これまでの移民研究には、事例の偏重がみられ先進国への移民や難民に焦点が当たってきたように思う。湾岸アラブ諸国が分析対象となることは少なく、本書は移民研究に新たな視点をもたらしている。さらに、本書は、2014 年に明石書店から出版された『湾岸アラブ諸国の移民労働者――「多外国人国家」の出現と生活実態』をもとに、その後の研究成果を加えてイギリスの出版社から英語で刊行したものである。学術の国際交流が重要視される昨今、英語による国際発信をおこなう本書は、国際的な移民研究の発展に寄与できるものとして、大変意義深いものである。

本書は、10 年間に及ぶ共同プロジェクトの成果を基に、アジアや中東地域を専門とする研究者によって書かれ、湾岸アラブ諸国で暮らす移民労働者、特にアジア諸国からの移民労働者に焦点を当てている。さらに、実証研究に基づき分析され、湾岸諸国内における社会空間と、その社会内において展開される当該国の国民と移民労働者との共存のあり方、そして、アラブ湾岸諸国に焦点を当てた移民研究の重要性を説いている。対象とされているアラブ湾岸諸国は、アラブ首長国連邦（UAE）、オマーン、カタル、クウェート、サウディアラビア、バハレーンの 6 カ国である。

本書は 2 部 9 章で構成されており、第 1 部では、湾岸アラブ諸国が多数の移民労働者を受け入れることで生じた状況、制度、社会経済構造について論究している。湾岸アラブ諸国においては、移民が労働力として吸収され、湾岸諸国にとって移民労働者は欠かすことのできない存在であるが、移民労働者とホスト社会との間に分裂が生じた状態が続いている。その一方で、社会統合の欠如が否定的とは限らないことも指摘されている。第 1、2 章では湾岸アラブ諸国の移民労働者の状況に関連する政策、制度を分析し、政府の移民労働者への管理においておこる諸問題の解決について検討している。さらに、第 3、4、5 章では移民の家事労働者と雇用主の関係を論じている。女性移民労働者とその雇用関係について、家事労働者に依存することから生じる大きな社会的影響が指摘されている。

第 2 部では、アジア系労働者の生活世界に焦点を当て、移民労働者が形成したネットワーク、コミュニティの形成や移民の生存戦略を細かく分析している。特に、第 2 部ではフィリピン、インド、バングラデシュからの移民労働者の事例を取り上げており、移民労働者の永住権やビザに関する内容が、欧州を目指す移民労働者と湾岸アラブ諸国を目指す移民労働者とでは大きく異なる状況が示されている。なかでも注目すべき点は、各著者実施の民族誌的調査（ethnographic research）に基づいて、移民労働者と社会との分裂のダイナミクスを明らかにしている点である。以下では、各章の内容を概観する。

第 1 章（堀抜功二）では、国際労働力移動における湾岸アラブ諸国の位置づけについて、湾岸アラブ諸国に関する基本的な情報、データ及び、政策や制度を分析して検討している。本書が対象とする湾岸地域は特殊事例として取り上げられることが多いが、本章は、湾岸アラブ諸国の現状をふんだんなデータを用いて明らかにし、湾岸地域を世界的な労働移民の中に位置づけ、決して特殊事例でないことを示している。

第 2 章（松尾昌樹）では、受け入れ国の労働下における国民と移民労働者の状況に焦点を当て、移民労働者への対応について湾岸アラブ諸国内を 2 つに分類しモデルを提示している。そこでは、各国における国民と移民労働者の労働参加率の競合について「高分業諸国（highly divided countries）」と「低分業諸国（less divided countries）」に分類がなされる。前者は、国民の約 8 割が公的部門で就労することから、移民が労働市場で競合しない状況を作り出しており、クウェート、カタルそしてアラブ首長国連邦が該当する。その一方で、後者は、国民が公的部門、民間部門に半数ずつ、もしくは民間部門への偏重から、分業体制緩やかな国であり、サウディアラビア、バハレーン、オマーンが挙げられる。湾岸アラブ諸国にとって移民労働者は必要不可欠な存在であり、彼らの増減はそれぞれの国において根幹的な課題となっている。

第 3 章（辻上奈美江）では、サウディアラビアにおける家事労働者の流入について、特に、家事労働者を

管理するサウディアラビアの雇用主の女性を対象に分析している。プライベートな空間に「他者」が介入するという状況の分析は、非常に興味深い。女性家事労働者の位置づけは事例によって異なり、加えて、長期雇用による影響も生じている。さらに、プライベートなケアの空間に外国人が進出したことは、グローバルなケアの拡大の一環と位置づけられる。つまり、社会構造の変化に伴いケアのグローバル化が可能になったことが、家事労働者の流入を支えていると認識できる。

第 4 章（リマ・サバン）では、アラブ首長国連邦における家事労働者への過度の依存により引き起こされた影響について分析している。アラブ首長国連邦のドバイ首長国において、他者が入り込むことが難しいとされる UAE 人家族（Emirati family, エミラティ家族）を事例に、家族単位の構造的、感情的変容を検討している。UAE 人家族に関する二次的情報などのデータに基づく分析に加えて、興味深いのは、著者自身のフィールド調査の成果である。エミラティ家族内における個人的な生活の経験を通じて、家族単位の空間的構造が歴史的に進化・変容を遂げてきたことがわかる。

第 5 章（渡邉暁子）では、湾岸アラブ諸国に向かう女性移民家事労働者の出発前プログラム（pre-departure program）を取り上げている。近年、家事労働者を送り出す様々な国で実施されるようになってきたこのプログラムの背景と内容について、執筆者はフィールド調査のデータを基に分析している。家事労働者の送り出し国として本章で取り上げられているのは、フィリピン、スリランカ、インドネシア、インド、エチオピアである。労働者のための「保護」と「安全」のためのプログラムであることは間違いないが、問題が山積していることも否めない。移民労働者の保護に関する問題は、労働者の生存にとって大きな課題であるため、このようなプログラムなどの上手な運用が必要であることが痛感された。

第 6 章（石井正子）では、フィリピン人家事労働者に対する公式及び非公式な保護の取り組みが考察されている。特に、フィリピンでは国策として移民労働者を世界中に送り出しているが、移民に関して最も多く問題が発生するのが湾岸アラブ諸国だという。そのため、労働者の保護の一環として公式及び非公式なセーフティネットが設けられている。

第 7 章（細田尚美）では、アラブ首長国連邦で働くフィリピン人に焦点を当てて、分析している。さらに、国籍や階級を超えて、新しい関係性が築かれていく様子や、彼らの間に見られる生存戦略、ネットワークやコミュニティ形成の実態が明らかにされている。彼らの生存戦略は主に「カバヤン・ネットワーク」を通じて維持されている。さらに、フィリピン人の約 8 割がカトリックという宗教的な特徴を生かしてコミュニティ形成がなされている。また、国籍や階級をも超えた団体を組織することで他の職に従事する同国籍の人々と交わることが可能となり、アラブ首長国連邦在住のフィリピン人の重要なコミュニケーションの場が作られている。

第 8 章（渡邉暁子）では、アラブ首長国連邦とカタルにおけるフィリピン人の改宗を取り上げ、当該国の国民と移民労働者が分かれた社会の中で、イスラームへの改宗がどのような可能性を持つのか、フィリピン人の視点に沿って、改宗後の変化を分析、考察している。フィリピン人のイスラームへの改宗は、ホスト社会に参入する重要な契機にもなっているようである。特に、湾岸アラブ諸国はムスリムの割合が多く、改宗すると労働環境や経済状況が改善される傾向にある。とはいえ、改宗によってホスト社会との共生や統合に結びつくとは必ずしも言えないようである。

第 9 章（松川恭子）では、アラブ首長国連邦ドバイ首長国のインドのゴア州出身者に焦点を当て、ドバイとゴアを結ぶ国境を越えたネットワークを通じて「ゴア・クリスチャン」としての意識の高まりと、どのように生計を立てているのか明らかにしている。彼らのネットワーク形成には近年発達している SNS の役割が大きい。さらに、キリスト教会の活動を通しコミュニティの形成を行い、ゴア・クリスチャン意識を強化している。ただし、これはゴア州出身者内の状況であり、他の州との繋がりは見られない。この現状を踏まえ、ゴア州からの移民労働者を他のインド人移民労働者とまとめて捉えることはできないことが指摘されている。

以上に各章を紹介したが、本書が優れているのは、多様なデータと事例を交えて湾岸アラブ諸国の移民労働者の様々な状況を的確に読み解いていることである。また、統計データやフィールド調査から得た知見をうまく組み合わせ、複雑で不安定ともいえる移民労働者の現実を明らかにしている点が長所である。本書が国際的な移民研究に貢献することは言うまでもない。

本書は、現在ムスリムの生存基盤、特に食（ハラール食）の文脈で研究を行っている評者にとっても大変有益であった。本書で指摘されているように、永住を希望して欧米諸国を目指す移民労働者と、永住に重きを置いていない湾岸諸国における移民労働者は対照的な存在である。この視点から見える論点は、評者がこれまで西欧諸国や中東、東南アジアにおけるフィールド調査において確認してきたムスリム移民が経営する食堂やレストラン、精肉店などの状況にも共通している。そのため、移民労働者の社会経済状況が食の文脈にも影響を与えていることがはっきりと看取された。

グローバル化の進展と並行して今日進んでいるのが、急速にありとあらゆるモノ（物質だけでなく、人や物、情報など）を消費していく時代の風潮であるが、様々な理由から母国を離れた移民労働者として生存基盤を構築している人々は、そのような風潮からどのような影響を受けていくのであろうか。これは地域研究者にとって、今後関心を持って取り組むべき大きな課題であると感じられた。本書に示されているような多面的・多角的な研究が日本国内でも国際的にも発展していくことを願っている。

（桐原　翠　日本学術振興会特別研究員（PD）
立命館大学衣笠総合研究機構プロジェクト研究員）

安達智史『再帰的近代のアイデンティティ論――ポスト9・11時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム』晃洋書房　2020年　xiii＋418頁

2001年にアメリカで発生した同時多発テロ事件や2005年にロンドンで起こった同時爆破テロ事件、そして近年の難民問題などの国際社会を揺るがせた大事件によって、しばしばムスリム系移民は公の議論の的とされ、排外主義や批判の対象とみなされてきた。本書は、そのように移民・難民の包摂と排除が常に問題となってきた西洋に生きるムスリム系移民の在り方について、イギリスの移民第二世代にあたるムスリムのアイデンティティに焦点を当てて分析するものである。著者曰く、本書が取り組もうとしている課題は西洋社会とイスラームの両立といった「社会統合の（不）可能性をめぐる問い」（p. iv）ではなく、「『ムスリムの若者はいかにイギリス社会に統合しているのか』という方法や戦略をめぐる」（p. iv）問いに端を発している。本書はこの問いに答えるべく、多くの移民第二世代のムスリムの語りが分析の対象となっており、豊富なインタビュー調査に基づいた充溢した議論が展開されている。なお、本書の議論のベースとなるイギリスにおける多文化主義と移民の社会統合の展開に関しては、著者の前著である『リベラル・ナショナリズムと多文化主義――イギリスの社会統合とムスリム』（勁草書房、2013年）に詳述されているため、そちらも併せて一読することをお勧めする。

本書は、研究の背景と理論枠組みについて述べている第I部と調査の分析に主眼を置いた第II部によって構成されており、章立ては以下の通りである。

第Ⅰ部　背景・理論枠組み
　第1章　イギリスの移民第二世代ムスリムのアイデンティティと社会統合――二重意識、女性、多文化主義
　第2章　イギリスにおけるムスリム――形成、政治、現状
　第3章　先行研究と理論的フレーム
　第4章　調査概要
第Ⅱ部　分析・結果
　第5章　差別、メディア、表象
　第6章　ブリティシュネスと「多文化空間」としてのイギリス
　第7章　〈文化／宗教〉の区別
　第8章　イスラームの〈知識〉とインターネット――イジュティハードの機能
　第9章　女性と教育